



図版4 裏書き「明治四十四年九月二日三浦幸太郎氏離別記念として撮影」個人蔵  
 (前列左端が村松進、その隣の着帽の人物が白瀬轟)



図版5 甲斐國一宮淺間神社蔵 天正17年「一宮御神領帳」のうち 27ウ、28オ



# 白瀬南極探検隊員村松進の足跡

小畑 茂雄

はじめに

わが国における南極関係史には二度の大きな挑戦が刻まれている。一度目が白瀬(しらせのぶ)を隊長とする明治末の南極探検(2)であり、二度目が一九五〇年代の国際地球観測年(3)を期した南極地域観測(1)への参加である。いずれも困難を顧みない人々の挑戦の軌跡であり、彼らの業績はわが国の科学史に重要な足跡を残し、同時代においては国際的な評価や、国民の意識の高揚をもたらした(5)。その一方で、当時の日本の国際的地位や経済力、調査・観測事業への国家的支援の不十分さなどから、その南極への旅はあらゆる面で困難極まる挑戦だったといえ、彼らの意識や業績の無二の価値が評価される一方で、わが国における未知の領域への調査・研究に対する意識や評価の低さを浮き彫りにしているともいえる(6)。



村松進肖像写真 個人蔵

この二度の南極への挑戦においては、いずれにも山梨県出身者が関与している。白瀬南極探検隊には、本稿で取り上げる市川大門村(市川三郷町)出身の村松進(7)、南極探検船開南丸の機関士のち隊長秘書として参加し、昭和の南極地域観測には、増田村(笛吹市)

出身の矢田喜美雄(8)が観測事業への参加への提唱者として名をのこしている。村松と矢田については、山梨県立博物館夏期企画展「たんけん！はっけん！南極展 壮大な自然と人々の物語」(9)において紹介したが、まだ十分にその動向は知られてはいないといえる。そこで、本稿においては、南極展で紹介した資料や調査状況を中心として、村松家資料など比較的資料状況に恵まれている村松進について、その動向を明らかにしていきたい。

なお、村松進の生涯と業績についての基本的な事項については、親戚筋にあたる村松定史氏にご教示いただいた。また、白瀬南極探検隊に関する事項については、白瀬南極探検隊記念館(秋田県にかほ市)の石船清隆氏にご教示いただいた。

## 一、村松進の履歴に関して

最初に村松進の人物像にまつわる基本的な事柄をみてみよう。村松家は、戦前から戦後にかけて郷土史家の中心的存在として活躍した村松志孝(蘆洲)(10)や、甲斐国に種痘をもたらした医師・村松岳佑(11)を輩出している。村松進は医家の系統の三男として生まれ、長兄は県病院長も務めた村松學佑(12)である。村松定史氏のご教示を中心に、村松進の略歴を表すと次のようになる。

明治十八年八月十八日 村松覺雄・なか夫妻の三男(第五子)として誕生  
 明治三十二年四月 旧制山梨県中学校(のちの旧制甲府中学校)に入

学

明治三十五年三月 旧制山梨県第一中学校卒業<sup>(13)</sup>

明治三十九年 横須賀海兵団入隊

明治四十三年十月 白瀬南極探検隊入隊

明治四十五年五月 帰国

不明 南洋興業入社、マーシャル諸島ヤルト島勤務

不明 東京にて実業に従事

大正十五年二月 病にかかると

昭和二年六月十四日 死去

これらの経歴は、村松進の墓所である花園院（市川三郷町）にある墓石に刻まれている。このほか、村松家と進に関する事がらとして、父である覺雄の早世も挙げられる。

明治二十八年十月五日 村松覺雄死去

村松進の生い立ちのなかで、わずか十歳の時に父を失ったことは、彼ら残された遺児たちの学業や成長に少なくない影響があり、母なかは彼らの進学や進路に大きな役割を果たしたことが、村松進の実姉小島みつじの手記「私の生母について」<sup>(14)</sup>にもあらわれている。小島の手記には、彼らの母なかは、きょうだいの進学の機会に後押しをしたことや、腕白な三男進の育児に手を焼いたこと、また南極探検への参加にも「村松家にはいまだ直接国家の為に力を尽した者は一人もない、大いにやってきなさい」と後押ししたことが記されている。

村松進の姪にあたる村松菊枝（學佑の三女）の手記<sup>(15)</sup>には、若き日の村松進について次のように記されている。

進叔父は生来平穩無事な生活に甘んじられない人であったように思われます。そのため甲府中学校を卒業後、横須賀海兵団に入りましたが、その間祖母のなかや長兄學佑（私の父）を大分手こずらせたらしく、当時病院を

経営していました父はある日患者さんから「先生の弟さんが馱で切符切りをしていますよ」と告げられてびっくりして了ったとか。あれには弱ったと後年母が述懐していました。

これら村松家の女性たちの記録によって、村松進の活発な人柄が垣間見え、南極探検という道へとつながる人物像の一端が感じられないだろうか。

家族からの視線の村松進という人物の輪郭がみえてきた一方で、まだよくわからないのが、村松進の学業から就職、白瀬南極探検隊への入隊にいたる経歴である。墓碑銘には明治三十五年（一九〇二）三月、旧制甲府中学校卒業とあるが、同年の同校の卒業者名簿には石橋湛山（二年落第しての年次なので村松進とは厳密には同級ではない）や、のちに甲府市長を務める新海栄治の名前があるが、この名簿に村松進の名前はみることができない<sup>(16)</sup>。前後数年についても同様であり、村松は卒業を待たずに途中で退学するような、何らかの特殊な事情があったのかも知れない。いずれにしても、同校の関係資料を中心に、今後調査すべき課題となっている。

横須賀海兵団での村松進の動向についても、管見の限り関係する資料を見出すに至っていない。村松進にとって、この海兵団（海軍）経験こそが、機関士としての白瀬南極探検隊への参加につながる経歴となるので、今後の重要な課題といえるだろう。

村松定史氏は、白瀬南極探検隊に応募した隊員のメイカルチェックをした医師の名前に「村松」の名を見出し、これは村松進の実兄である學佑である可能性を指摘している<sup>(17)</sup>。白瀬探検隊において書記長の職にあった多田恵一の『南極探検私録』の「船員決定」の項には、「以前発表した資格を具備し、其履歴の比較的良好なもの二十餘名に召集状を發して、十月廿七日午前九時から帝國醫科大學入澤内科で其体格検査を行ふことゝなつた。検査醫は伊賀、村松、田澤の三醫學士で、此中の合格者十名の中から即日仮採用に決し、入渠中の用船補修の勤務に願ひしものは左記氏名の者であつた。」（※傍点は筆者による）と、出港一ヶ月前のセレクションの内情を記述している。